

しゆしやうぎ だいごしやう ぎやうじほうおん  
修証義 第五章 行持報恩

このほつ ぼ だいしん おお なんえん ぶ にんしん  
 此発菩提心、多くは南閻浮の人身に  
 ほつしん いまくく ごと いんねん  
 発心すべきなり、今是の如くの因縁あり、  
 がんしやうし しやばこくど きた けんしやか むに  
 願生此娑婆国土し来れり、見釈迦牟尼  
 ぶつ よろこ しず おも しょうぼう  
 仏を喜ばざらんや。静かに憶うべし、正法  
 よ る ふ ととき しんめい しょうぼう ため  
 世に流布せざらん時は、身命を正法の為  
 ほうしや ねご お  
 に抛捨せんことを願うとも値うべからず、  
 しょうぼう お こんにち われら ねご  
 正法に逢う今日の吾等を願うべし、見ず  
 ほとけ のたま むじやうぼだい えんぜつ  
 や、仏の言わく、無上菩提を演説する師  
 あ しゆしやう かん なか  
 に値わんには、種姓を観ずること莫れ、  
 ようがん み なか ひ きろ なか  
 容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、  
 おこな かんが なか ただはんいや そんじゆう  
 行いを考うること莫れ、但般若を尊重す  
 ゆえ にちにちさんじ らいはい くぎやう  
 るが故に、日日三時に礼拝し、恭敬して、

さら げんのう こころ しょう なか いま  
更に患悩の心を生ぜしむること莫れと。今

けんぶつもんぼう ぶつ そめんめん ぎょうじ きた  
の見仏聞法は仏祖面面の行持より来れ

じおん ぶつ そも たんでん い か  
る慈恩なり、仏祖若し単伝せずば、奈何

こんにち いた いっく おんなおほうしゃ  
にしてか今日に至らん、一句の恩尚報謝

いっぼう おん な ほうしゃ いわん  
すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況や

しょうほうげんぞうむじょうだいほう だいおん ほうしゃ  
正法眼蔵無上大法の大意これを報謝せ

びょうじやくな おん わす さんぶ かん  
ざらんや、病雀尚お恩を忘れず三府の環

よ ほうしゃ きゅうき な おん わす よ  
能く報謝あり、窮亀尚お恩を忘れず、余

ふ いんよ ほうしゃ ちくるいな おん ほう  
不の印能く報謝あり。畜類尚お恩を報ず、

じんるいいかぞ おん し そのほうしゃ よげ  
人類争か恩を知らざらん。其報謝は余外

ほう あた ただまさ にちにち ぎょうじ  
の法は中るべからず、唯当に日日の行持、

そのほうしゃ しょうどう いわ どうり  
其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は

にちにち せいめい なおざり わたくし ついや  
日日の生命を等閑にせず、私に費さざら

ん<sup>ぎようじ</sup>と行持するなり。光陰<sup>こういん</sup>は矢<sup>や</sup>よりも迅<sup>すみ</sup>かな

り、身命<sup>しんめい</sup>は露<sup>つゆ</sup>よりも脆<sup>もろ</sup>し、何れ<sup>いず</sup>の善巧<sup>ぜんぎよう</sup>

方便<sup>ほうべん</sup>ありてか過<sup>す</sup>ぎにし一日<sup>いちにち</sup>を復<sup>ふた</sup>び還<sup>た</sup>し得<sup>え</sup>

たる、徒<sup>いたず</sup>らに百歳<sup>ひやくさい</sup>生<sup>い</sup>けらんは恨<sup>うら</sup>むべき日<sup>じつ</sup>

月<sup>げつ</sup>なり、悲<sup>かなし</sup>むべき形骸<sup>けいがい</sup>なり、設<sup>たと</sup>い百歳<sup>ひやくさい</sup>の

日<sup>じつ</sup>月は声<sup>しょう</sup>色<sup>しき</sup>の奴婢<sup>ぬび</sup>と馳<sup>ち</sup>走<sup>そう</sup>すとも、其<sup>その</sup>中<sup>なか</sup>

一日<sup>いちにち</sup>の行持<sup>ぎようじ</sup>を行取<sup>ぎようしゆ</sup>せば一生<sup>いつしやう</sup>の百歳<sup>ひやくさい</sup>を

行取<sup>ぎようしゆ</sup>するのみに非<sup>あら</sup>ず、百歳<sup>ひやくさい</sup>の他生<sup>たしやう</sup>をも

度<sup>ど</sup>取<sup>しゆ</sup>すべきなり、此<sup>この</sup>一日<sup>いちにち</sup>の身命<sup>しんめい</sup>は尊<sup>とう</sup>ぶべき

身命<sup>しんめい</sup>なり、貴<sup>とう</sup>ぶべき形骸<sup>けいがい</sup>なり、此<sup>この</sup>行持<sup>ぎようじ</sup>あら

ん身<sup>しん</sup>心<sup>じん</sup>自<sup>み</sup>からも愛<sup>あい</sup>すべし、自<sup>み</sup>からも敬<sup>う</sup>うべ

し、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が行持<sup>ぎようじ</sup>に依<sup>よ</sup>りて諸<sup>しよ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の行持<sup>ぎようじ</sup>見<sup>ぎ</sup>成<sup>じやう</sup>

し、諸<sup>しよ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の大道<sup>だいどう</sup>通<sup>つう</sup>達<sup>だつ</sup>するなり、然<sup>しか</sup>あれば

すなわ いちにち ぎょうじこれ しよぶつ しゆし  
則ち一日の行持是れ諸仏の種子なり、

しよぶつ ぎょうじ いわ 謂ゆる諸仏とは

しやかむにぶつ 釈迦牟尼仏なり、  
しやかむにぶつ 釈迦牟尼仏是れ即

しんぜぶつ 心是仏なり、  
かこげんざいみらい 過去現在未来の諸仏、  
とも 共

ほとけ な とき 時に かなら 必ず しやかむにぶつ 釈迦牟尼仏とな

これ るなり、  
そくしんぜぶつ 是れ即心是仏なり、  
そくしんぜぶつ 即心是仏

たれ というは誰というぞと しんさい 審細に せんきゆう 参究す

まさ べし、  
ぶつおん 正に仏恩を ほう 報ずるにてあらん。

年 月 日

氏名

謹写